

幸せへと続く道
 私が東京の早稲田大学に、留学をしていた1
 ヶ月間、日本の母として毎日おいしいご飯を作
 ってくれた風間早苗さん。その風間さんが生まれ
 た1935年は、日本が欧米から、評価を得ようと
 していた15年戦争の最中でした。風間さんは今
 年79歳になり、東京都の新宿区の大久保で娘さ
 んと2人暮らしをしています。
 新潟県の長岡市で生まれた風間さんの父親は、
 日本国有鉄道の会社員でした。1940年、風間
 さんは長岡市から、埼玉県に引っ越し、その一年
 後日本は英米と開戦しました。1944年の東京
 大空襲の際の燃えている東京の記憶が、今も鮮明
 に焼き付いています。埼玉県では無事に過ごしま
 したが、東京都内の家は焼夷弾によって、燃えて
 しまいました。しかし、戦争前に父親がよく頼
 ていた大工さんの協力もあり、材料が何もない状
 態から家を再建し、その家に現在も住んでいます。
 占領下の日本で学校に通っていた風間さんは、

高校を卒業した後、「女の子はガリガリ勉強する
もんじゃないから」という父親の考えで、家政専
門学校へ行かなければなりませんでした。その時
代はまだ父親に従わなくてはならない慣習が強く
つたので、「良い妻」になるためとの思いで、専
門学校に通い始めました。

1955年の女性の進学率を見ると、短期大学
へ行く日本人の女性はわずか6%でした。家
政専門学校では日本の伝統とされている食事や日
常生活に関する行儀を学びました。風間さんは文
句一つも言わずに、二年間通いました。

風間さんは一家の長女であつたので、若いころ
から家事の手伝いをしていました。風間さんが1
0歳の時、お母さんが急病で亡くなり、お婆さん
達はすでに年を取り家事ができなかつたので、第
二次世界大戦の間、家族を養うために一人で全
くの家事を行いました。学校に通い始めてから、父
親がメイドさんを料理のために雇いはしましたが、
それは風間さんが学校へ通つている時間帯だけだ
つたので、学校から帰れば風間さんが家事をしな

ければならず、自分のための時間が全くありませんでした。学校以外の時間は家事に費やす、本当に大変そうですね。風間さんは「慣れているから、大丈夫だ」と言っていました。

総務省統計局によると、1955年の女性就業者数は150万人弱で、働いている女性は15%ほどでしたが、風間さんは家政専学校を卒業したその年、父親の紹介で電報を受け取る仕事を始めました。しかし、風間さんは20歳上の男性と見合い結婚をすることになったので、その電報の仕事には1年間しか就きませんでした。厚生労働省によれば、その当時は未婚見合い結婚の割合が高く、1960年代の恋愛結婚・見合い結婚の構成比は、見合い結婚が4割弱、恋愛結婚が4割弱という状況でした。風間さんも同様に、父親が選んだ相手と、たった一度の見合いで結婚することになりました。

風間さんは仕事を辞め、専業主婦になりました。それから毎日は家族のために過ごしました。風間さんが56歳の時に夫が亡くなり、それから留

学生のホームステイを受け入れ始めました。これ
 までは家事に専念してきた風間さんは、食事を作っ
 てあげる相手がいつまでもいて欲しいそうです。
 第二次世界大戦の中で育ち、アメリカ軍の焼夷
 弾によって燃えている東京の記憶がまだ残って
 いる日本人という意識を持ちながら、アメリカ人の
 ホストファミリーになるというのは、そう簡単に
 できることではないと思います。また、専業主婦
 という役割に自信を持つ人が少ない中で、風間さ
 んは若いころからずっと料理してきました。それ
 ども6の年間以上毎日誰かに作ってあげたいと思
 う気持ちに私は驚きました。自分の道を選ぶこと
 はできなかつたけれど、その中でも毎日の喜びを
 見つけている風間さんとの出会いは、人生の意義
 を考え直すきっかけとなりました。
 人生とは、レールの上を走る電車のようなもの
 です。そのレールが予期しない方向に曲がったと
 しても、本当の幸せへと続く道が断たれたわけでは
 ないということを、風間さんの出会いの中で学
 びました。